繪本八犬外傳

へ13
3249
2

へ 13
3249
2

昭和十一年一月二十四日

栗燈夜話小栗外傳卷之六

東都　絳山歡酬陳人戲編

神戸市立藏書之印

第十編

舞妓再を唄うて密計を諭す
老僧因て説く未前を示す

小栗判官代助重を馬を乗おさめく。静ゝ横山が対ひ礼を做せば。横山が頼きゝうは鬼駒なる容易素ぢめぐれ。豫ての謀相違ー。仙中易うふびとりくどもまこと謀るべきことも。あくふめと心みあくふねと喜びの色を発ー某が日頃の望足ぬるとの喜びーと小栗が馬術を賞美し酒肴をもうけて饗ぬ。さて豫ての約速なるが縁を照天姫と婚姻を整ー此日よりして助重を照天が止め他事なれさるゝを待遇こうされども横山が仙中あ。奈何ー助重を失うんと。家よ其子供ぬと淺り

ゝ孝が太郎孝平の兄弟ハ忠義なる照天姫を小栗に奪ハれ、主命なるゆゑ
なく討果さんとおりゐるが、二人をみ出ていくらゐの小栗とて鬼神
ともいふべき彼足と迂遠なる謀を用ひまゝ鬼驕がごとくあらぶ塗炭を
塗を陥るごとくなるん。不如速ふ人数をりて討ちんと計ひたるを
三郎安武これを制し。小栗主従の武勇慢ぶ力をりて討ちんとせば。
味方のりめを多く挽ぶ且ゝ討漏さんことをうがし幸明日ゝ父の生
誕日なれば其寿を祝ゝと披露し。小栗をまゝき酒を強乱酔の射を
ゝうて毒酒を呑ちめんゝいふ猛き助重ゝもせよゝを下さどゝく
失んゝと案の種なり人くいうに却ひふと述ればゝ父の安秀ゝとゝ思ん。
兄弟も限りなく喜び。これ千金の計策なり。いざゝらば其准備せゝと。
俄ゝ酒肴をゝ〳〵小栗ゝりゝふゝ云ゝりゝふゝ明日ゝ我生誕日なれば

寿筵を作ちんとゝ夫婦も其席ゝ連りて我寿を賀ゝ人と有ゝふゝ。
小栗まゝ辞べたゝゝ辞べ命畏りゝ明日の事憂ゝとゝ
いふゝと回意して使を選ゝ助重照天姫ゝ対ひ明日のゝ清身ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ照天眉をゝ安秀ゝ近日の光景ゝを物ざゝ
のみゝ殿ゝゝ〳〵ゝ響ゝ恐ゝ云罵ゝ
ゝ慇懃ゝ待遇ゝゝ不審ゝゝ彼ゝ想
ゝゝ明日のゝ記掛ゝ爾ゝ辞ゝ怪ゝ
ゝて宜ゝゝ案ゝ俄ゝ膝ゝ拍ゝ
ゝゝ故武義國六浦の産ゝ城ゝ女子ゝ
今ゝ横山の侍女ゝ横山ゝ為ゝ引ゝ既ゝ娼ゝ
ゝ奴家便ゝ強ゝ我侍女ゝ

志寿忠女にして且奇弁の侫にたけてゐしを横山漸く心に叶ひしがはや似ずこれを愛し終に我物とし酒宴あることに駈付るゝ弁謡して平日に側を去らしめず大事を議る席にも立入らせ断なり横山に寵せらるゝ信ど其頃横山を怨むこと甚だしたゞ奴家の娼婦に売られし恨ざりし深く恩に着我身のことを議ることあればこそ告しらせすべれば明日のことも未だ知りてゐんと阿ば密に娥を招きけるにとゆるて傍近く来らせてしりぞけ娥何事かと知りたがる程に今日横山殿兄弟の人々と密に議るの事ありて俄に明日の寿宴の催あり其餘不審と思へど必ずある謀あると知らば明日清水危うしと申せば告まゐらせんものをと涙く出し悩ましそと思ひしが去なりし〇小栗を娥が物語りもうち出居らじ〇出往し跡にて照天姫に

対ひ明日横山が寿宴は必定我を謀なるべし。彼们がふ除恐るゝに足らざれど名ある勇士と云へども運拙き時は痴夫女子の手に落命者和漢その例少からず明日の会宴となく打進まざれど往かざれは臆したるに似たり。弓矢とる身の名こそ惜まれ是彼のことと思ひ悩せども。あん身と語らふも今夜限りと成りやせん嗚呼定めなき世の中にあらじん今日まではと云って過しが今夜名残となりもせば怨こそあらんこの忠憂あれば父へまゐらせんと照天姫は父なる光重の横死も横山安秀の所為なりとは這般ことの亊にて知りねと前日道助が物語せしことおもひ出し詳に父へ知らせ照天姫ゆとれを父よりまゐらせ即ち嘆しが女にあって涙とゝもに胸をうち歯切声ふるはし云へり知れに知らねば云ふまでも天ざ人共にせね仇と一ッ家に住居して

朝夕敬ひかしぎまいらせ思へば今念願はらし今知るうふ束間も打捨
おくべきことろと小縷と高く褰げ長押よりかけ眉尖刀を小脇
ふかいとみいきまきく走り出んとする処を助重暫時と推止めいさ
ふこと道理あぐら我云爲をよく〳〵孫横山幸和ねれど丈夫なり
猶ほ五人の子どもとじめ猛悪逆多うは中人女子の唯一人義勢達
あて向ひあぐ君を抱ひて深淵より望より尚危ふ〳〵返討るも成のぐ
いうで孝子といとろぐ我此るを告ぎりしと斯あるぐしとぐ〳〵
そ〳〵たるき行伏〳〵の俳諧とうけまふう篤光の女児助まぐ妻なくふ
ぐ父や夫の名を下ととを本意とぐ思いまふこそぐろなうと涙
ひまぐ照天姫らうぐ夫の練と学て御ふ公を静めて云りうれそ
女心の一とぐふ想ひ迫くうかるく物狂〳〵ふまし殆非余ふ

死んとせ〳〵夫の賢死教ゆより。身を全ふさるのみるふぐ正〳〵道伏
好うりしまりさんさりあぐら父の仇ここも〳〵討でるんことらうでころふ
忍びもぐ〳〵んあられ君奴家ぐ力伏助け仇を討てまるれとかく口説つ〳〵
えるぐ小栗助重うち跡首某とても横山ハ男は健云のことなまぐ討
ふんとう想へども彼ハ眷属多又ぐれば討換ぐるぐなるくふ我身の害を
惹生〳〵宿志を遂ぐ妨なれば是まぐうちるこそぐしそ明日の壽莚
の附宜まより討果さんと想ふ〳〵さんぐでも前ふ云ふとく若運はきく
失もせぐぐ身此所を逃れ生我命名と心を合〳〵横山ぐとふさふあ
いうぐど我父の仇一色伏討てとぐう云さして鬼神も嘆く重う涙さし
くむ雌しさん明日の夫婦の生別まことりのぐ知ふとる兆〳〵や照天姫
もそうともに涙さんれて居うしぐあら涙をあ〳〵ねぐひこいまふ〳〵

下栗
横山
明天
五手
風間次郎
風間八郎
田邊平六
小栗横山が
奸計を推て

沈毒を
避く
池庄司

命うれる関八州ふ鬼神と怖まるる武士の
り一ことあらぶ女こくと。空しき死をば做るべん。奴家も武士の妻なれば
いさぎよき討死せん。身を厭ふあらぐ程ど者ふきに
勅ぬるあいと拙ほ。君ら病と称しるく奴家のこ者ども三日程そしく
ぜこゆれが小栗改を左右ようちふり。今日まで恙なく身を明日俄ふ
病といらぐ。必竟横山代恐ま。我妻をかこと逃まーと。世の人ふかられこ。
生く世と恥辱ぞり。我心既ふ変せり。いとく仏を悩ーあるひそ明日を
夫婦法ともふ横山ぶりとふ勅ん。くとくもとやまりてことを仕移ー
給ひそとくく。父へ諭ーたる。さて十人の郎等を召ー。密ふ謀を示し
合せ明日の准備をすーいろ。斯く其日にありしぶ小栗夫婦ふ十人の
郎等をもーめ玉まを俱ーて正屋なほ横山安秀ぞりとふ到りぬ。

物なり。生誕日の壽をのべられば安秀喜びーるさるあて山海の珍味
を整へ。五人の子どもをーて多くに食意ぞり。小栗ぞり兵衛佐や
ちつーんと隈ふ少代ばくまどぞ。さるとありとも又くざれば。少ーく心
ゆり。酒酌ぞりーうち奥ーぞ多ぞ。照天姫ふ横山を父の仇とおりへど。仏裡
楽ーまどぞ。そりく小栗ふ目配せを助重も其仏を知りはまーご横山を
討べき隙もあら拙ぶ。世所ふ長居せんふ詮なーと思ひ酔ーられてんら
りてはぞ。さぞふ其帯をまりるんとする付横山安秀小栗ふ對ひく
ぞりあふ足下知ーふ一はる母ーらん我りとふ嫌とや了髪のわが。
照天姫ぞ侍女なり。手暮られど。飛燕ぞ業と粗ぞられば客人のる
ちれよ雑興ーて興を助ぞり。今日も彼ふ一曲を舞さてべ花ふ
者と。今一杯を傾けるくとさーむるふ助重辞まんやうなくさ有

幸あてそぐらん。やとく幸さしまくと望ころる。安寿姫は
それくことあるれば。豫て公を沼うろうん娥襲束おふくるあてこれ子ゐ
立烏帽子著。席の中央ゐ幸生ろう。助重これとろうろ平日ゐうんー
とゐことかろう。鄙ゐ子ゐ訓ね姿ろこの。そのき文正ろ初ゐの注んとこ彩が
ゆく。谷の戸あけて営るの初音に拍ーき声ろうあげ。

忘れても汲や志ちらん旅人の高井の奥は玉川の水

と云古歌をもーかくーく三度まで唄ひそ唄ひそろ。見図の人ろこ幸ゐ
のう心奈ろ唱哥のことべつく幸彩く。たぐ叡どよめたこ尊ろう小栗
夫婦ゐこの哥を伺。彩ゐ妻ゐ遊ゐーて。此哥を唄ゐべきふゐらぬ推楽て
三回ろそ唄ひたること正ーく昨夜彩ーたるこのれゐ横山が巧のこと沢
明白ゐ云がろく。哥ろて知ーこれなるぐー。この歌ゐ高井山の玉川ろ毒水

なれが。人をーて飲ちゐーと。大師の漢ゐくろうろとれとりて足と想くを。
此後生と酒ゐ。ゐ彩ぐ毒ありろんと。悔ろれゐまゐ婦目と目沢え合ーゐ
ろ手幸を知ーこ彩ゐ。これより後ゐ幾回も盃を取ろぐーぶ。飲そいゐりてを。
一滴も口ゐ入ぐ居ろう。模山親子ゐ娥が流ー唱歌ろも幻なを。
まろ小栗が酒を呑ぐるをもちぐ。今ろそや想ふまうに誘ろうと密
ゐ社びろう。小栗ゐ郎当の此酒を呑や志ちると。寒ーぐ炉ろくゐあぐろ
愁ひの色面ゐ彩ぐ。安秀心彩ー。小栗ゐ顔をうちえろゐ常ゐ碧し
光景ろれが。こゐ正ーく毒酒の験彩ぐーゐや。心娥ーく助重ゐむくゐ。
ゐ子ろゐふちゐ。ゐ彩ぐ世の常ろふ。ゐろ。何ゐろ想ひゐふ今日を
某が毒延ろう。添く物ろゐりひろゐ。助重彩ろれーぐ。
ゐて奥ある毒延ゐて。いろぐ物を想ひそぐらん。いろなほろゐゐや俄ゐ

幼稚頃の志うなり。此の席も堪へうかく退んと存じ入べき。丈人の
おぼしうの程ども畏こけまでの所の仕りはうく今いくやの免の蒙り
ぬべきと云ふ。横山心理あり我謀うわりと密かに喜ぶとい入べき。こぎと繁ひ
うはおりくちしそれ知ふねことそてうとぐめまわ巳ぬるこころ迄。
仇う苦しからんかく退り給ひそ。いうそりあれ巳。中よ照天よ女婿乃
心ち例うくふぶと宜ふ誘引まあ〜せそよく着病せうとまあぐちて
らひ罵り。度様まで助け送りて別れけて此剛尼岡加太郎は加藤郎
の兄弟待うけて助重を助け付んとて小栗の傍の郎等居ふざるを
見て心程ふく怪しみ其行衆を問へば尼岡兄弟畏りてやうを申う。我く
手でも横山殿の仕業ふあぐう。誰くもいく酒に酔ふ仕る
ぞうもうへぐふ給ぶ。殿ふもぬへあげそ。前に退〜ん我く兄弟へ。

知ふ〜めとぐく酒をうられば酔どうみちぐりのなんと回意
なまそ。小栗心驚る。且怒彼們が酒をうふ酔て物の用ふたぐぞ
といふ。正〜く毒酒を呑ふうあてあるべ。ぬる無残もまうと念の
あかり。多くの郎等を害せられいくもあく帰らるべき刀の後ん
限り横山一家のりのごもを切殺し。郎等の仇を報んとぞ。そのの
色の面ふ顕まれば尼岡兄弟これを猜目ぬりく知ふし。朋輩等ぐ
酒ふ酔ふ常ふも知ふ〜めしぬぐら。今日酔ふふをうぐ怒りふふ
れ盃を和とくに還りあれしと助重ぐまとうて強らふ引て還りられ
処ふ。風間兄弟兄弟小栗小太郎の三人出迎へうふ。小栗再びおぐ病き
汝ふ酒ふ酔て物の用ふたぐぞと宜ふ。中酔の醒ぬるこそ不審
なれと呼ぶ。尼岡兄弟回意ふ不審のふ道理ふ。昨夜君の

命を兼まこが今日樸山のりとふ糸るとその侍兵ゑるど伏置やとこ永
の隈く。物の隙ゑ乙をけくれどさる猪もえく移ど。こハ刀ゑりこ敵
がこくれが毒害ゑのどさるゑゆや。と乙をけくちりら。娥ゑ寄活の声ゑ
ゆメこゆるふ耳をそゑがざてく女が高野丈師の玉川の寄ゑりさそい
毒害ゑること弐娥の知りて知くじなるゑそと乙ひ人くとよく減り。
酒を呑人を呑ゑのをくして呑ゑがくゑて毒ゑ中ゑ侍よりてゑく。我く
より前く選ゑじ。君此地を落ゑりん准備をゑこひ。我く兄妻りとゑくて
酒を嗜ざゑ弐が人も知りそのくが悪ゑ。ゑて跡ゑ残り。君ゑちん侍
をゑがはゑゑまゑわり。斯てゑ樸山安秀。君をそゑの我くが富湖の光景
ことゑがけんと。自らまるゑ男児を求をゑ。二ゑの内を生べくゑゑ君ゑ風間
兄生の人くゑ俱して落ゑ。基兄ゑゑ世ゑゑ踏止り樸山向くくゑ。

君ゑ人くゑも毒ゑあくゑり自害くゑのくが我くゑ富期の防矢射で共ゑゑ自
害をとと偽り。歩射ゑほど樸山をさくく其後館ゑ火をかけ。その移ゑてゑ
乗じ。ゑ跡ゑより乗りゑりんと変へゑれが。助を甚深のくこに移ゑを賞し。
疲ゑまゑひ立退んとゑゑりくと。偽方ゑゑ落んと躊躇をゑりゑっ。玉くゑもと娥
喘息くく走ゑて云くりゑをゑゑ。君選くせゑくし。后樸山安秀。を郎次郎ゑ
下知し。君の乙光景をこゑ届くべし。若いまゑが死もゑらでゑくゑが首討ゑ
とと。部下の賊徒を催ゑんこれくゑゑまとゑるゑ心せゑれ。幸じて忍びまゑりん。
ゑくく落ゑ世ゑ人さいゑひ娥が故郷ゑ。六浦ゑてこれゑゑ乙移も近し。ゑがゑ
彼ゑ人ゑ退ゑひ人くとよく詠ゑも角も。ゑ奴家楽内ゑ乙ゑ
とゑゑとゑゑゑ小栗ゑの婦今ゑ究猿林ゑ投ゑるの附かれがいゑで木ゑ縋がゑ
逞ゑゑん娥ゑくゑんゑまゑし小栗ゑ鬼駙ゑゑち乙ゑり照天の姫ゑが美貌

小太郎は脊負ひ。風間兄弟はありあふ調度をかき荷ひ。玉手とかほよ姫
伴ひ〳〵。六浦をさして落ちゆき。程もめぐらせば横山太郎安嗣。同名部
安春は父の命によりて小栗が死生を見届んと。部下の賊徒数十人とおぼし
此所へ来向ひ合ふ。互ひその心照天姫成桑ぬと思へば。兄弟先と手をつく
向ひ合ひはぐとて到りそ。その家裡の光景を窺ふに門を八字に開き元岡
兄弟廣縁丹左顕目。弓矢たばさみ高ちゃ縁にはい足に小栗
判官代助重の臣。丹左衛門加茂太郎春教同加茂太郎春高といふ兄弟乃
りの〳〵只今こゝに来りし横山の人々とこそうれしけれ。よくも来りあふ
とのゝ形。汝ぞ謀よりて我君あまくも欺れ。毒酒をきこしめし終ふ
法会念仏をうと形〳〵。今自害しあふ処なり。さるかくふ我く兄弟防矢結く
汝ぞを一〳〵討ん。君に対面の後殿せん。いざや忠義の鎧うけとめよと。已に結

ひきたるを散〳〵射ゆうば。利欲おちる盗人ぞ。元岡兄弟の箭先は
もとより横山兄弟下知とれど。後へのみ走りごみ。間なくゆ来のもはう法。
兎角するうち餘の裡火ゆ火発り。焔めぐれば元岡兄弟弓矢を
投捨。今ぞ足手でなりと太刀ぬきかざし横山が勢ぞ斬て入まべ。
部下の賊徒兄弟の勇威ぞ恐れ秋の木葉の散るごとくむらくもと門と
逃失ぬう。相手なられば兄弟は顔見合して完尓と笑ひ。いざゝらば君ぞ
追着ぬんと後門の方より忍び出ぬう。小栗判官代助重
照天姫とりつともに六浦の方へ落ぬし。仍て料らん横山三郎安武は
小栗は尋ぬの人ぞあふぞ逃れ出ぬ。多くの部下と
引俱し。後道の方に埋伏して居ぬり。案に差はず小栗夫婦風る兄
兵衛小太郎。玉手姫を伴ひ逃れ出ぬうばさてとそ過ぬ暴に対て

生のうりれば小栗大きに怒られ馬を還しと戦ひ合ひて。風間兄弟美登
小左衛門主ふる失わらんと式おそれ。照天姫をばとおほ木陰よりたちのぼし。
玉手姫をしてこれを守らし。三人一般おのおのきはれて主と助け横山の勢と戦
々ふ。助手ハさ〳〵し。此三人ハ武勇ハ万夫無敵なりといへども。ひとん共
不意を討れ。二つのハ婦人を誘ひ〳〵られば。其ハ戦ふことを好まず。
且三郎安武千変万化の術を施し。彼方と討ハ這裡発り。這裡ハ制され
て彼方襲ふ従四人をとりとめて新くまと入籠責ふ。さてとうの小栗
ハ従も労ひ果てえんとしを。忽然として横山が勢。後の方ようやく知れ
ぬ。右往左往に走り散ぬ。小栗怪しと敵はばふ立めぐり堅ふ
左より池庄司後ハ兄弟右より風間兄弟。後より風間兄弟。必死ハ成
て討入り。忠義の豪傑七人ハ切立られ。ずいぶん暫時も敵とぐ散く

ハなりて敗走を。池庄司ハ三郎を目ざして追ふ〳〵。終ハ追詰て討ぬ。
今ハ敵一人もなくなれば。主従一所ハ集互ハ恙なきを喜びあるに。
小栗ときくて落ちぬ。物語れば風間兄弟も横山兄弟ハ敗北追ひ
散せしことをのべる。ときに庄司申さく。我〳〵七人蒲沢の方ハ結ぶ。一人の
老僧ハ行合ぬ。彼僧の云ハ主人ハ今六浦の方へ落ん。途みく
滅の道ハ若しわられいと者ハ。やく敵ハ。ことあれハ怒れ。こハ走
ぬ。つ果ハ。僧の教のごとくなれば。有ぬ。ぬ。三郎
安武を討ぬ。その首を助重の実検ハ入れば。主従かきり歩く喜び
けり。庄司ハ申さく前刻より事ふきれて姫君の法
事と問ふ。いづくハ。ふてこれ。ぬ。とらんぬ。小栗前ハ滅のこれハ
囲ひ。附美堂小左衛門彼巫る木陰ハ忍び居り。小左衛門ハ

小栗夫婦
従臣を
将て
権現堂村
と走る
小栗主従
横山次郎
播山大郎

小栗卷之六
庁岡加三郎
庁岡加太郎

供ひ給へとあるを。笑ひ命をうけて前の木陰に往くとゝ思ふこゝろ
玉も珠も落こて失てあり。照天と娥こゝろ其彩もなき有る猿と其足を
尋ねるに。さらに知ることなし。絶さぬ程こて立還り初と出見へ小栗と従
うら驚き。主従十人手分して呼びて尋ねど。木魂の回廊のこゝろて。
影ばかりもなんとも。小栗助を切歯斯ぞう尋ねるに。必定故の
為に擒となりたるこゝろめ。さはあても我こゝを従形てありなんず。此ぶ三
相俱に求つれ我妻を敵に奪れもめくゝと此まてるうんハ三甲斐なし。
あくまで取て返し。横山が館に斬て入り。我妻を元かへさんと想ふなり。
人こいうに却ぞと同つに。郎等一般にいうで命と乗をべらんいざこせ
多人と云ちにも。池庄司を涙に咽び。横山三郎と我世の敵なる彩
それとも知ぬと我に掛て討元へ皇天の情ふよりてこのうち。

君の位大つに望みるに附前に近まぎ侍ふ。不忠よ似くこゝの人ど母
の屍を形捨置に忍ひ祈ぶせあてこゝ形を法一。の後より走ふくんよ。
歩附の位眼をのつれと受へめぐるに助言も其孝心を感じけり。我做
るゝ私に。て汝ぐるゝ孝道なり。いうで孝と私と式かめべき我も共ふ
汝が力を助け。王手が埋葬式営人人も孝子と助け行くせよ。いとも
賢な王命に池庄司ハさくに云ひと陪従郎等一般に仁愛侍な王命
と感佩。ばく畏こて涙を入れ。皮袋をかりの極と助長に母の玉す
の屍を法こゝ。さの脊負ひ。さくべ先き院もめれしと四方式拝み
折こゝに送ふ法と。念仏の声に小栗を哀ひこゝ幸のことなりとゝ今
此所に来ほる侍を軽み。玉まゝ導の師とせんと。念仏の声ぞあくべ。
道式当ひぐ尋ね至れば。一人の老侍白髪式祭うゝ。元が男ふと夜と

衣を穿。左手に一鉢を持げ。右手に黎の杖を携。票々として去る。
その殿に墨染の衣を着る体青法師二人従て。伴となく走るふとくもを
け出て。小栗に深く信心を起し恭くれをなして云へりけるは。某は小栗助重
とりのあてゆるす。郎等あてい池庄司助長とかの。母不料も及ぶ
かりて没命に旅路のこゝろぶくまぶ。埋葬をえ寺流もなく新墓ふくと
に伴もおたさをいと心憂想し悩こゝぞりしに不意に伴のこゝゆうき
のことを幸なり。めつれ引導の師となるうまれしやよ助ちよ泡もこゝみ
まりて彩みなまとゆるく助長涙もしぬびちゝみ近づに老伴氏熟こく
こゝはいろに前刻に主人の危難を告し伴形れば驚に伴こゝも礼なし。
前刻に伴に遭まゝぶせどに主の危難を故のこと新ぐりしに敷に伴く
某ふす忠をさ給へり。此恩いろう忘とかゝくまぶ。よく祖

あまふに正しく仏菩薩の接化ふこそもとゝゝめかるいとゞに伴よいま
まこと環舎こゝに佛神三宝の冥助とゝひとゞ頂くに大慈の恵ぶ
非命に死せしたぶちの上仏化を行はしるひ祈と鬼をも敬く丈夫の母れ別
の悲しぶに涙せきあるうみ声云こと人もあやなにを孝子とこそ
知ふれる老伴うち点頭やよ助長うとゝ漢きこのふに道理ながらこと
渾因縁あることなれば嘆くに不孝ぞ。とも変道を相州茂沢郡
三宝寺光院清浄寺の現住常阿とりもの。足下ふう従の前世に
我寺に因縁あること。且に過去未来のこゝとそて昨夜祝言の変相
詳に知ふに前刻に危難を告て主ふ救に今又こゝまゝて後ふの幸と
流んとゝ。疑念を発さに貧道ぶ言語を聴ふ人々の足まで難苦を逢ふに
見渾命ふり。今日既に九死を出く一生ふるひしも又命ふり且小栗殿の

内君を失ひのゝしを歎じまし。其行衆を捜索とおのゝどこに労しく易なれのみふあぶどうろく身の害ふ及ぶきことあれば思ひ止りうきを内君ハ観音菩薩の恵護しの人ハ百折千磨ゆハ人と節を失ハず其身悪なくて后夫婦再会して栄ゆくことありねを其ようを見下ら郎て居まるで誠再び寄まり。生路を辺ろふ易くじを我寄ふ寄まり如此ゝ計謀を巡て其禍を免れ人と頼ふ説ゆろことをて小栗主従ハ托行上人の事ハ聚て伝人其徒をるみおりふ今こんとふをさるのみ彼ゝ志しくる去未寄のことを示され信心膳よ銘じつ感謝の涙とぶうふ。皆附ものも云ひ。ゆ。あつて助重をうろん。凡俗の我く。過世の因といひぶら菩薩ふ拾ひ値偶しちるさ人冥加あふ。志ひれ示よあづうふこと。礼をゆとをされ。数ふ

ゆうせ寺へまゐりうんわどふ。尚この上のこと頼こちまうとまうし。ゆこゆ。常阿上人ゆ。くも貧道ぶ言語を聴ふのうれ。敵の寄せね其前ふ。いざ人くと。付ぶうちふ助長を。毋よおうれく矢かうく。躊躇居るを朋輩に慰められて漸と毋の屍骸負つて。茨沢さして急だろう

第十一編

妃嫗欲を逞して二娘を宿義婦身を殺して女王を救ふ

且説常阿上人を小栗主従を付ひ茨沢なる清浄ふ送りまゐ此附を是應永三十三年九月廿日の事なり。上人等ふの傍をしく大ゆうふ坑を堀ゝしめ。薪を多く積ゝ。其中ふ玉くまを屍をおゝ。こをふ火をさゝたれ折ゝも樵山太郎。同次郎を昨日斥岡兄弟ふ敗られと易くぬとふ想ひ足非を云ろど。小栗主従を討えんと。近郷の山賊

神戸市立博物館蔵書印

数百人をかゝゝゝ甚殿を逐ひて此寺に住まり。小栗主従のことを問ふに
常阿上人模山兄弟に對面し。我昨夜金澤にて小栗主従に行遇した
彼輩酒毒発し苦痛に堪へず。そこで生べた幽めゝゝ孫べ後世のことを
知らんに頼むよしをなへるはゞいと不便のことゝおもひまゐらせ。
終に自害して果ぬ。されば其屍を埋むとゝゝゝふこと玉まと茶毗する
を小栗主従あうと歎くあり。上人の偽ゝざるを世の知る処なれば邪智
深き模山兄弟もさて爾めり法をよとろふ。玉まゞ屍を焼息まの
ちゝゝゝゝゝゝ疑念なく別を告て去ぬれば。上人小栗に對ひ今の色
易し。然るども此寺に居るべく。人の疑ひあり。貧道三州よりゆうりゑまで
人をして彼下に忍び居るゝゝゝ心をなゝゝゝゝゝ時の至るを待べく
自ら志を明る期めゝんと教ゆるに助重上人の言語よまろ。十人の郎等

を榜て。三州へとそ赴きゝるに。
藤沢の道場に小栗主従の石塔今あり。并小栗夫婦の影像且
鬼鹿毛のゝゝゝゝゝ書うんと。此寺の什物ゝゝ今も存せり。
此等の事を附記ゝゝゝゝゝ。

蕎沢の道場小一栗
主従こゝ首目に落ちる
小ぜうゝ有く
也はいらに落ち
ぬ